

[研究報告]

## A 県における母乳育児の現状と課題 — 母親が満足する母乳育児支援を探る —

末 永 芳 子      羽田野 花 美      中 島 由紀子

Current status and issues of breastfeeding in A prefecture :  
Support of breastfeeding for mother's satisfaction

Yoshiko SUENAGA, Hanami HADANO, Yukiko NAKASHIMA

熊本保健科学大学 保健科学部 看護学科

【目的】 A県における母乳育児の現状を明らかにし母親が満足する母乳育児支援について検討する

【方法】 対象：A県の3市1町で、乳児健診を受ける母親。調査方法：無記名自記式質問紙調査。  
調査内容：希望栄養法、退院時・退院後の栄養法、入院時および退院後の栄養法や母乳育児支援に対する満足度等。調査期間：平成25年2月～平成26年2月。分析対象数386。

【結果・考察】

1. A県内の3市1町の母乳栄養率は1ヶ月時53.4%であり、退院後に母乳栄養率の割合が増加し、乳幼児身体発育調査（2010）とほぼ同様な結果であった。
2. 母親の90%は妊娠中に母乳栄養を希望していたが、「母乳栄養」「ほぼ母乳」の母親は67.9%であり母親の希望が満たされてはいないが、児に対する栄養方法についての満足度はおおむね高かった。
3. 母親の約3割は「母乳が不足しみ」「乳房・乳頭トラブル」など授乳中に困っており、「母親自身で授乳ができるようになるための方法」「母親の疑問や不安を解決する支援」などの母乳育児支援を希望していた。
4. 「母乳栄養」や「ほぼ母乳」の母親は、「混合栄養」や「人工栄養」の母親より満足度が高い。さらに母乳栄養率を高め母親が満足する支援を行なうためには、個々の母親のニーズに応じた母乳育児支援を行なうことや、母親が納得し育児に自信を持てるような支援が必要である。

キーワード：母乳育児，母乳栄養率，母乳育児支援，満足感，母親

### I. 緒言

近年、母乳育児の啓発や支援が推進されている。UNICEF/WHOは1989年に母乳育児支援を効果的に行なうための援助指針として「母乳育児成功のための10カ条」を発表し、1991年には10カ条の産科施設への浸透を図るため「赤ちゃんにやさしい病院運動 Baby-Friendly Hospital Initiative ;BFHI」を開始した。さらに、2003年には、「乳幼児の栄養に関

する世界的な運動戦略」を出し、その中で生後6ヶ月間は母乳だけで育てること、その後は適切な補完食を与えながら2歳以上母乳育児を継続することが勧められ、世界各国が母乳育児支援を強く推し進めている。

わが国では「健やか親子21」で推奨され、2007年には「授乳・離乳の支援ガイド」を策定し、妊産婦や子どもに関わる保健医療従事者が、基本的事項を共有化し継続的に母親を支援することを打ち出した。

母乳栄養率の推移は、平成17（2005）度栄養調査<sup>1)</sup>では1ヶ月時42.4%，平成22年度（2010）乳児身体発育調査<sup>2)</sup>では生後1～2ヶ月未満は51.6%であり、徐々にではあるが母乳育児推進の効果が表れている。

しかしながら、約9割の母親が母乳栄養を希望しているなか、母乳のみの栄養方法で育てている母親は約半数であり<sup>3)</sup>、希望どおりの母乳育児ができていない現状がある。また、母乳分泌促進の支援をしながらも母親のストレスが増大したため断乳を余儀なくされるなど<sup>4)</sup>母乳分泌が不十分な母親や、多様な価値観を持つ母親などにとっては、母乳育児を推進することが母親のストレスになる報告もある。母乳育児のメリットを提供しながらも、母親のニーズを尊重しながら、個々の母親が満足するきめ細やかな支援が求められている。

そこで、今回A県での母乳育児の現状を明らかにし、母親が求め、満足する母乳育児支援を検討する。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 調査対象

対象は、A県内3市1町の8カ所で6ヶ月～1歳8ヶ月健診に乳幼児を連れてきた母親812名である。

### 2. 調査方法 無記名自己記入式質問紙法

A県内の北部、中部、南部に位置する区役所および保健センター等に調査の趣旨を説明し、実施の承諾が得られた3市1町の8カ所にて無記名自己記入式質問紙法による横断調査を行なった。質問紙の配布は、健診時に研究者が行なうか、もしくは保健センター等に依頼を行なった。質問紙の回収は郵送法もしくは健診時に回収ボックスを用いて行なった。

### 3. 調査内容

#### (1) 特性について

年齢、初経産、今回健診を受診した児について、出産後6ヶ月までの就業の有無、出産週数、児の月齢および児の出生時体重等について回答を求めた。

#### (2) 栄養方法について

今回健診を受診した児について、妊娠中に希望していた栄養方法や、出産後（退院時・生後1ヶ

月時・生後3ヶ月時・生後6ヶ月時）の栄養方法を、①母乳のみ、②ほぼ母乳（母乳の割合80%以上）、③混合（母乳の割合20%超～80%未満）、④ほぼミルク（母乳の割合20%以下）、⑤ミルクのみの中から一つを選ぶ方法で回答を求めた。

#### (3) 出産施設での母乳育児支援状況について

施設の栄養方法の方針については「母乳推進」「母乳推進するが不足の場合はミルクや糖水を追加する」「混合栄養」「ミルク推進」「わからない」の中から一つを選ぶ方法で回答を求めた。また、支援状況については「母乳育児の利点等に関する説明・情報の提供」の有無やその支援が「栄養方法を選択するきっかけになったか」「役に立ったか」を、「とてもそう思う」「少し思う」「あまり思わない」「思わない」の中から一つを選ぶ方法で回答を求めた。支援状況については、早期母子接触の有無、自律授乳の有無、母児同室の有無について回答を求めた。

#### (4) 授乳中に困ったことについて

授乳中に困ったことについては、平成17年度乳幼児栄養調査<sup>5)</sup>に行われた「授乳中に困ったこと」の10項目うち9項目と「乳房・乳頭のトラブル」「乳頭痛」を加え11項目を設定し、「とても困った」「どちらかと言えば困った」「どちらかと言えば困らなかった」「困らなかった」の中から一つを選ぶ方法で回答を求めた。

#### (5) 退院後の母乳育児支援について

退院後に受けた支援についてはその有無と、相談相手については家族、友人、出産した施設の看護師、助産師など15項目の中から複数回答にて回答を求め、相談したことがない者についてはその理由を独自に設定した5項目の中から複数回答にて回答を求めた。

#### (6) 希望する母乳育児支援について

希望する母乳育児支援については、授乳・離乳の支援ガイド<sup>6)</sup>を参考に独自に10項目を設定し、「とても思う」「どちらかと言えば思う」「どちらかと言えば思わない」「思わない」の中から一つを選ぶ方法で回答を求めた。

#### (7) 児の栄養方法・施設の母乳育児支援・退院後の母乳育児支援に対する母親の満足度について

満足度については、児の栄養方法や入院中および退院後の母乳育児支援等を受けたことに対する満足感を、「満足」「どちらかと言えば満足」「ど

ちらかと言えは不満」「不満」の中から一つを選ぶ方法で回答を求め、その理由について自由記載を求めた。

#### 4. 調査期間

2013年2月～2014年1月

#### 5. 分析

統計学的検定には Statcel3を使用した。各項目は記述統計量として算出した。産後6ヶ月時の栄養方法とそれに対する母親の栄養方法に対する満足度との関係については、Kruskal-Wallis testの検定後、多重比較検定(Steel-Dwass法)を行なった。また、母親の栄養に対する満足度や母乳育児支援に関する意見の内容については、記述内容にそって、1内容1項目とし、その項目を意味内容の類似性を基本にカテゴリー化した。

#### 6. 倫理的配慮

研究者が所属する大学の行動科学研究倫理審査委員会の承認(疫24-36)を得て実施した。質問紙には①無記名であり個人が特定されないこと、②調査への参加は任意であり義務ではないこと、③回答の途中で中断しても、また不参加であっても不利益を受けないこと、④得られた情報は研究以外に使用しないこと、⑤調査結果は個人が特定できないように処理を行なった上で公表すること等について口頭および文章(郵送による配布の場合は文章のみ)にて行なった。調査協力への同意は、質問紙の回収および返送をもって同意が得られたものとした。

### Ⅲ. 結果

配布した母親の812名のうち、回収数は769名(回収率94.7%)であった。このうち、全項目に回答したもの386名を有効回答とし(有効回答率47.5%)分析した。

#### 1. 対象者の特性

対象者の特性を表1に示す。母親の平均年齢は31.7(SD=4.8)歳であった。初産婦が172名(44.6%)、経産婦が214名(55.4%)であった。出産後6ヶ月時までに仕事を開始している母親は52名(13.5%)であった。児の平均出生体重は3028.5(SD=382.7)

g、児の平均在胎週数は39.0(SD=1.6)週、児の平均入院日数6.59(SD=5.8)日であった。

#### 2. 妊娠中に母親が希望した栄養方法と実際の児の栄養方法の推移および母親の満足度

妊娠中に母親が希望した栄養方法を図1に示す。妊娠中に母親が希望した栄養方法は、「絶対母乳のみで育てたい」51名(13.2%)、「できれば母乳で育てたい」295名(76.4%)であり、89.6%の母親が母乳栄養を希望していた。

実際の栄養方法の推移については図2に示す。実際は、「母乳栄養(母乳のみ)」は退院時171名(44.3%)、1ヶ月時206名(53.4%)、3ヶ月時230名(59.6%)、6ヶ月時222名(57.5%)であった。母乳栄養の割合は退院時が最も低く、月齢とともに3ヶ月時までは相対的に増加を示すが、6ヶ月時にはやや減少した。また、「母乳栄養」と「ほぼ母乳」を合わせた栄養方法の割合は、退院時253名(65.5%)、1ヶ月時265名(68.7%)、3ヶ月時270名(70.0%)、6ヶ月時262名(67.9%)であった。一方、「混合栄養」は1ヶ月時までは減少幅は小さいが、それ以降は月齢とともに減少し、人工栄養の割合が増加していた。6ヶ月時まで母乳を飲ませている母親は、332名(86.0%)であった。

6ヶ月時の栄養方法に対する母親の満足感については表2に示す。母親の342名(88.6%)は児の栄養方法に対して「満足」「どちらかと言えば満足」と回答し、44名(11.4%)は「不満」「どちらかと言えば不満」と回答していた。自由記載欄へ記入があった「どちらかと言えば不満」および「不満」に関する内容は、「母乳で育てたかった」「母乳がでなかった」「児の栄養面に対する不安」であった(表3)。

母親の満足度については、「母乳栄養」および「ほぼ母乳」を「母乳栄養群」、「混合栄養」を「混合栄養群」、「ほぼ人工栄養」および「人工栄養」を「人工栄養群」として、3群間で比較した。「母乳栄養群」と「混合栄養群」および「人工栄養群」の間には有意な差があり、「母乳栄養群」が「混合栄養群」および「人工栄養群」より満足度が高かった( $P < 0.01$ )。

表 1. 対象者の特性

			n=386	
			人	(%)
年齢 (歳)	平均 ± SD	31.7 ± 4.8		
	年齢分布	20未満	1	(0.1)
		20以上～40未満	365	(94.6)
		40以上	20	(5.2)
出産経験		初産婦	172	(44.6)
		経産婦	214	(55.4)
出産後～6ヶ月時までの就業の有無		有	52	(13.5)
		無	334	(86.5)
妊娠中の希望栄養法		絶対母乳で育てたい	51	(13.2)
		できれば母乳で育てたい	295	(76.4)
		ミルクで育てたい	0	(0)
		どちらでもよい	38	(9.8)
		その他	2	(0.5)
在胎週数 (週)	平均 ± SD	39.0 ± (1.6)		
	在胎週数分布	37未満	15	(3.9)
		37以上～42未満	358	(92.0)
		42以上	13	(3.4)
児の出生時体重 (g)	平均 ± SD	3028.5 ± 382.7		
	出生時体重分布	2500未満	27	(7.0)
		2500以上～4000以上	358	(92.7)
		4000以上	1	(0.3)
児の入院日数 (日)	平均 ± SD	6.59 ± 5.8		
	入院日数分布	5未満	29	(7.5)
		5以上～11未満	339	(87.8)
		11以上	35	(4.7)

SD : standard deviation



図 1. 妊娠中に母親が希望した栄養方法

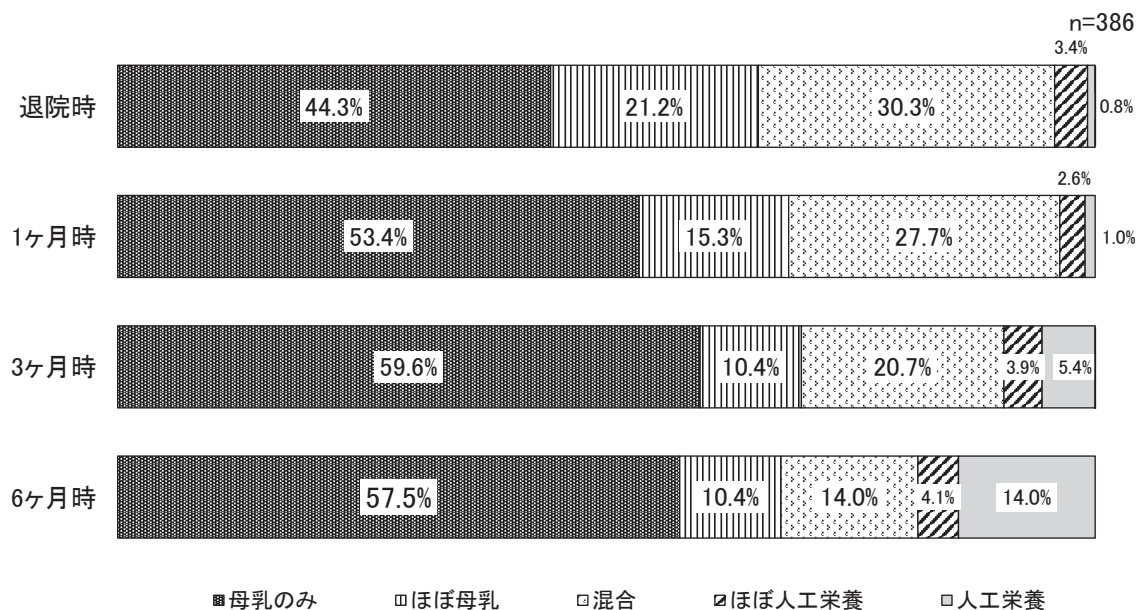


図 2. 栄養方法の推移



表2. 6ヶ月時の栄養方法と母親の栄養方法に関する満足との関連

n=386

	満足		どちらかと言 えば満足		どちらかと言 えば不満		不満	Kruskal- Wallis	Steel-Dwass
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
母乳栄養群 (n = 262)	191	(72.9)	61	(23.3)	10	(3.8)	0	(0.0)	**p < .01 母乳栄養群 > 混合栄養群 母乳栄養群 > 人工栄養群
混合栄養群 (n = 54)	13	(24.1)	30	(55.6)	11	(20.4)	0	(0.0)	
人工栄養群 (n = 70)	14	(20.0)	33	(47.1)	21	(30.0)	2	(2.9)	
合計	218	(56.5)	124	(32.1)	42	(10.9)	2	(0.5)	

Kruskal-Wallis, Steel-Dwass \* p &lt; .05, \*\* p &lt; .01

表3. 栄養方法に対する母親の満足度の評価理由 (自由記載回答)

n=386

満足度	カテゴリー	内容 (件数)
満足	良好な母乳分泌量	完全母乳ができた (22) 母乳で育てることができた (15) 母乳の分泌が良好 (13) 前回のよりも母乳がでた (3) 上の子と同じように母乳がでた
	順調な児の成長	病気せずに順調に成長した (26) 体重が順調に増加した (12) よく飲んでくれた (11) 問題がなかった [心配・困ったことがない] 離乳食も食べてくれた (2) ミルクで元気に育ったから 卒乳順調
	希望どおりの栄養方法	混合栄養で良かった (2) こだわりはないから (2) 母乳がなによりも良い (2) 仕事復帰に都合が良い 希望通りだった (3) 欲しがるときに母乳を与えた ミルク代がかからず良かった (2) 母乳を与えたい気持ちが自分にあったから (4)
	スキンシップになった 楽だった	母子のスキンシップになる 楽だった
	医療者からの支援	医療者等から、母乳の大切さを教えてもらった 医療者から母乳のみで大丈夫と言われた
	ほぼ希望どおりの 栄養方法	母乳・ほぼ母乳で育てられた (8) 完全母乳にしたかったが、ミルクでもよいと思う (4) 少しでも母乳を飲ませた飲ませた (3) 母親の生活スタイルに合わせた栄養法 (3) 経済的 何度も欲しがらない (1人目より母乳がでた) 上の子よりも母乳で頑張れた 直ぐにあげられるから
	順調な児の成長	元気に育っている (6) ミルクもいやがらず飲んでくれる (3) 離乳食、食べてくれる (1) 子どもが満足している様子
どちらかと言えば 満足	母乳で育てたかった	できれば母乳で育てたかった (14) 母乳のみだと、ミルクを受け付けけない (2)
	母乳栄養での不安や 困ったことがあった	完全母乳だったので、自分が食べる物がとても気になった (1) ちょこちょこ加えるのがめんどくさい 足りているか不安
	人工栄養もよかった	栄養面で安心 (3) 子どものため、良い選択
	楽だった	調乳の手間がなく楽 (1)
	スキンシップになった	スキンシップの時間になった
	他	あまりこだわりなし (2) 母乳がでないということを想定していなかった
	母乳で育てたかった	できれば母乳のみで育てたかった (4) 母乳で育てたかった (4) 母乳を多く飲ませたかった (3) もう少し母乳を続けたかった (3) 母乳をあまり飲ませられなかった (1) 出来れば母乳を飲んでもらいたかった (1)
どちらかと言えば 不満	母乳がでなかった	母乳がよかったがでなかった (5) 自分の食生活が母乳に良いものではなかった (3)
	児の栄養面に対する 不安があった	体重が増えなかった 母乳の不足分をを補足しようとしても、飲んでくれない 母乳のみだと足りているか不安 ミルクだと、栄養面・免疫力が...
不満	母乳で育てたかった	母乳のみで育てたかった 母乳育児を希望したができなかった

### 3. 出産施設での母乳育児支援の状況と支援に対する母親の満足度

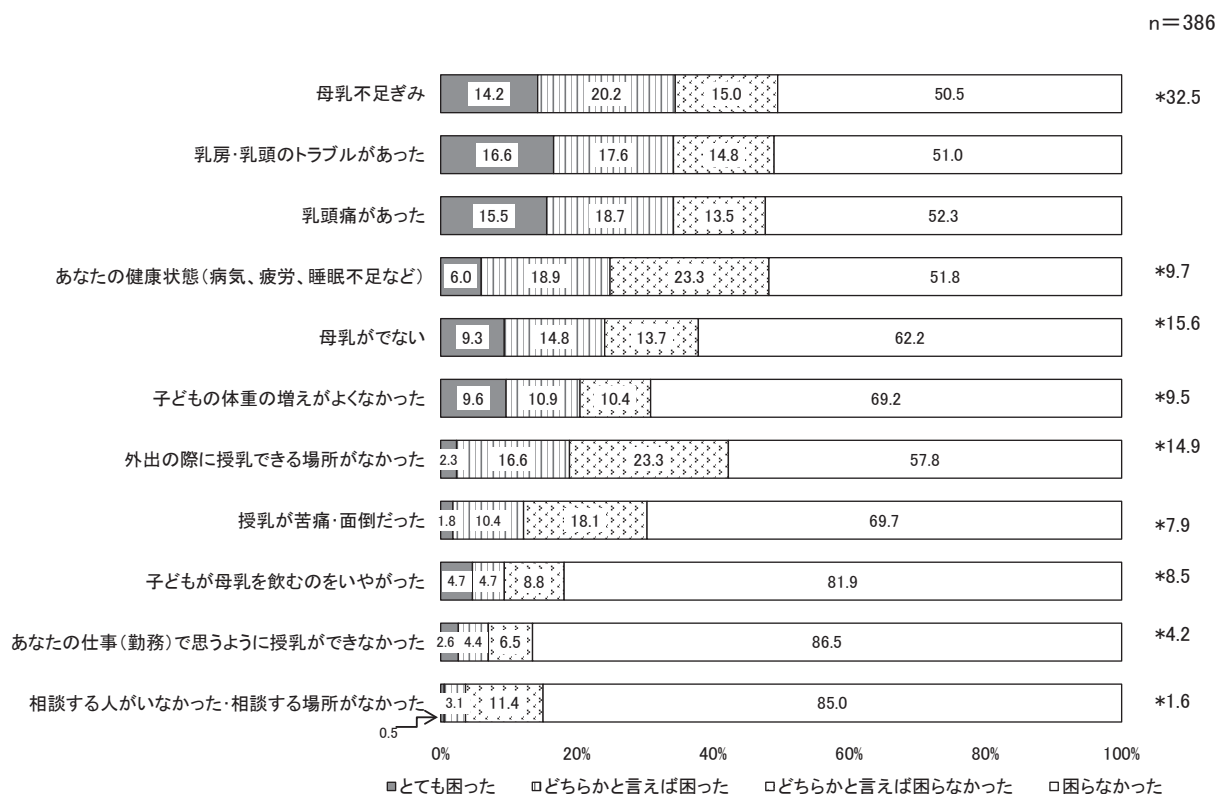
母親が回答した出産施設の栄養方針は、「母乳推進」142名（36.8%）,「母乳推進するが不足の場合はミルクや糖水を追加する」214名（55.4%）,「混合栄養」20名（5.2%）,「人工栄養推進」0名,「分からない」10名（2.6%）であった。また,母乳の利点に関する情報提供を受けた者は326名（84.5%）,母乳育児の説明や情報の提供が授乳方法を選択するきっかけになったものは「とてもそう思う」「そう思う」を合わせると315名（96.9%）であり,322名（98.8%）がその説明が役に立ったと回答している。入院中に受けた母乳育児支援は,「早期接触・早期授乳」275名（71.2%）,「自律授乳」347名（89.9%）,「母児同室」261名（67.6%）であった。出産施設での母乳育児支援に対する母親の満足度は,「満足」254名（65.8%）,「どちらかと言えば満足」110名（28.5%）,「どちらかと言えば不満」,21名（5.4%）,「不満」1名（0.3%）であった。

### 4. 母親が授乳中に困ったこと

母親が授乳中に困ったことを図3に示す。授乳中に「とても困った」「どちらかと言えば困った」と最も多く回答したものは,「母乳が不足しみ」133名（34.4%）で,「乳房・乳頭トラブル」132名（34.2%）,「乳頭痛」132名（34.2%）,「あなたの健康状態（病気,疲労,睡眠不足など）」96名（24.9%）,「母乳がでない」93名（24.1%）,「こどもの体重の増えがよくなかった」79名（20.5%）の順に多かった。

### 5. 退院後の母乳育児に関する相談状況および支援に対する満足度

退院後,母乳育児に関して相談（電話等を含む）および支援を受けたと回答した母親は165名（42.7%）であった。相談・支援者は（複数回答）「出産した施設の看護師」81名（49.1%）が最も多く,「家族」70名（42.4%）,「助産師」59名（35.8%）,「友人」46名（27.9%）の順に多かった（図4）。また,相談等をしなかったと回答した母親は221名（57.3%）であり,その理由は「相談する必要がなかった」



\*平成17年度国民生活基礎調査結果「困ったこと」と回答した者(%)

図3. 授乳中に母親が困ったこと

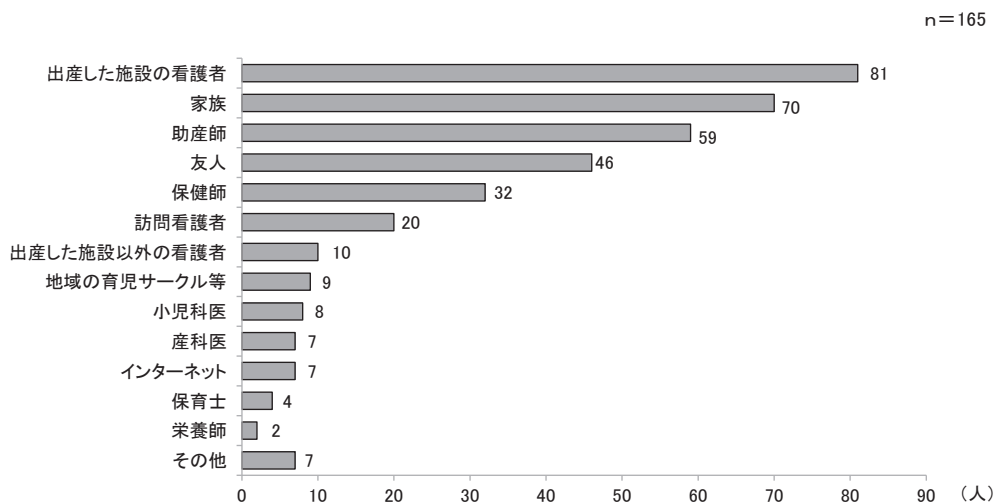


図4. 退院後の母乳育児に関する相談相手

\* 複数回答

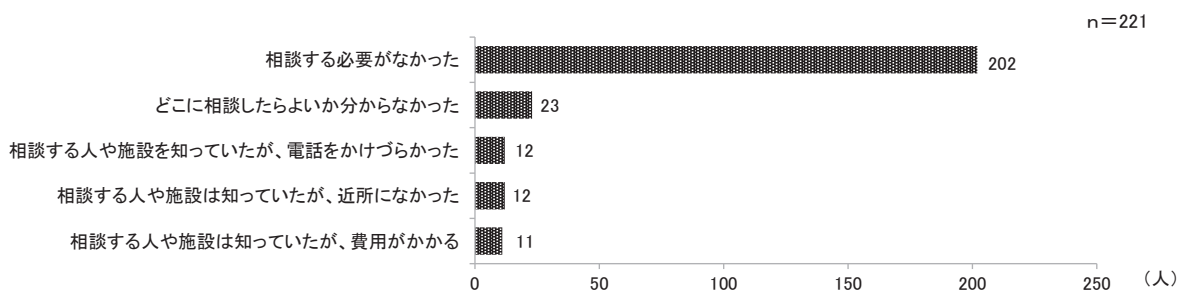


図5. 退院後の母乳育児に関する相談をしなかった理由

\* 複数回答

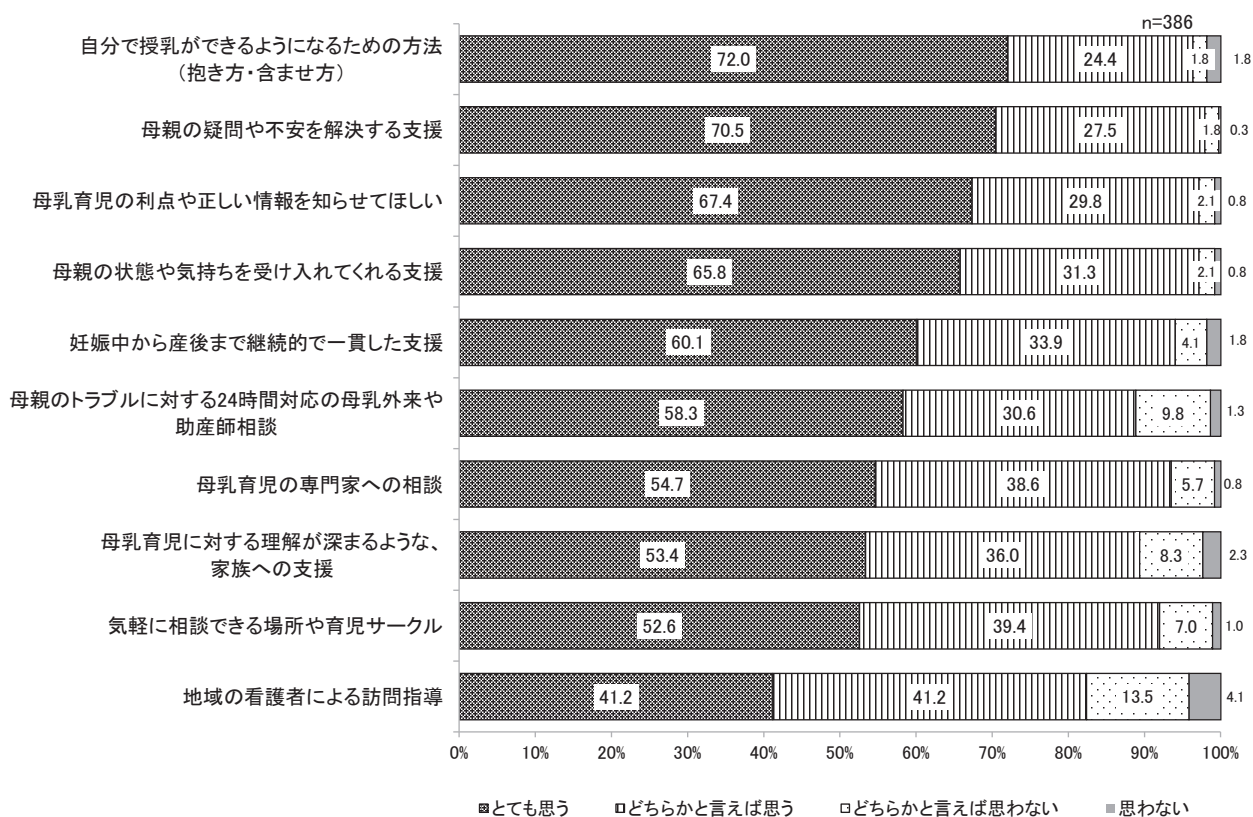


図6. 母親が希望する母乳育児支援

202名（91.4%）であった。しかし、「どこに相談したらよいか分からなかった」23名（10.4%）、「電話をかけづらい」12名（5.4%）、「近所になかった」12名（5.4%）、「費用がかかる」11名（4.9%）などの回答があった（図5）。

退院後の母乳育児支援に対する母親の満足度は、「満足」103名（62.4%）、「どちらかと言えば満足」52名（31.5%）、「どちらかと言えば不満」9名（5.5%）、「不満」1名（0.6%）であった。

## 6. 母親が希望する母乳育児支援

母親が希望する母乳育児支援を図6に示す。母親が希望する母乳育児支援のなかで、「とても思う」と回答したものは、「自分で授乳ができるようになるための方法（抱き方・含ませ方）」278名（72.0%）、「母親の疑問や不安を解決する支援」272名（70.5%）、「母乳育児の利点や正しい情報を知らせてほしい」260名（67.4%）「母親の状態や気持ちを受け入れてくれる支援」254名（65.8%）、「妊娠中から産後まで継続的で一貫した支援」232名（60.1%）の順に多かった。

## Ⅳ. 考察

### 1. 母乳育児の現状と母親の満足度

今回調査したA県内の3市1町の母乳栄養率は、退院時44.3%、1ヶ月時53.4%、3ヶ月時59.6%、6ヶ月時57.5%であった。退院時よりも母乳栄養率が増加し、月齢が進んでも50%を越え維持できていた。また、「母乳栄養」と「ほぼ母乳」を含む母乳栄養率も増加し、月齢が進んでも65%を越えていた。平成22年度の乳幼児身体発育調査<sup>7)</sup>の母乳栄養率は、1～2ヶ月未満51.6%、2～3ヶ月55.0%、3～4ヶ月56.8%、4～5ヶ月55.8%と報告されている。それに対し今回調査した母乳栄養率は、全国的なデータよりやや高い傾向を示すが大きな差はない数値と言える。また退院後に母乳栄養率が増加するという傾向も同様な経過を示していた。その要因は母乳育児推進の成果と言え、母乳育児に対する母親の意識の高さや、妊娠中～退院後の母乳育児支援が充実してきたことが推察される。出産施設での支援の状況は、84.5%の母親は妊娠中に母乳育児の利点や方法についての情報提供を受け、母親のほとんどが授乳方法を選択するきっかけとなり役立ったと回答して

いる。また、「母乳育児を成功させるための10ヵ条」の中で、「早期接触」「自律授乳」「母子同室」の3項目は母乳栄養確立に重要な支援であるが、今回の調査では各項目の支援の割合が平成17年度の調査（早期授乳32.4%、自律授乳52.9%、母子同室17.3%）<sup>8)</sup>に比較すると増加している。さらに、出産施設を退院するまでに「ほぼ母乳」の母親は、退院後も人工栄養には移行せず、「ほぼ母乳」を維持できている。これらのことから、母親が母乳で育てたいと思う気持ちとともに、その母親への支援（退院後1週間健診・電話相談・家庭訪問等）が退院後に継続して行われていることが推察される。張<sup>9)</sup>は入院中に母乳が十分確立できないまま退院になった場合は退院後早期からのフォローアップが欠かせない。退院時すでに母乳育児が確立している場合でも、母親の不安は退院後から1ヶ月健診までの間が最も高いという調査もあり、母乳育児継続のためには退院後のフォローアップが必要であると述べており、A県内でも出産施設のフォローアップ体制が充実してきていると推測する。また、柳沢は<sup>10)</sup> 出産後1ヶ月時の母乳育児の割合が増加傾向となった要因として、子育て支援政策（健やか親子21）により乳幼児家庭全戸訪問や国内数々のNPO法人などの市民団体が果たした役割とその影響力は大きいと述べていることから、出産施設や退院後の地域での支援の充実等が考えられる。

一方、「混合栄養」は1ヶ月時までの減少率は小さいが、1ヶ月以降では月齢とともに減少し、人工栄養の割合が増加していた。ほとんどの出産施設では1ヶ月健診までは母乳育児支援が行なわれるが、それ以降の継続支援体制の不足も推察され、特に、混合栄養で母乳の割合が80%に満たない母親に対する継続した支援体制の充実が課題であると言える。

今回調査した母親の約90%は妊娠中に母乳栄養を希望していたが、生後6ヶ月時点の母乳栄養の割合は57.5%であった。ほぼ母乳（母乳の割合が80%以上）を含めても67.9%であり、母親の希望が満たされているとは言えない状況である。しかし一方で、児の栄養方法については、母親の約9割が満足という評価であり、栄養方法の結果についての満足度はおおむね高いと言え、成田<sup>4)</sup>の報告と同様な結果を得た。また、母乳栄養群は、混合栄養群や人工栄養群より満足度が高かったことより、母親が希望する母乳栄養へと支援することが母親の満足度をより高



めることにつながると言える。

また、満足と回答した母親の理由は、「良好な母乳分泌」や「希望どおりの栄養方法」などがみられるとともに、「児が順調に成長している」という内容も多くみられた。完全母乳ではないが、混合栄養で多少の母乳を与えることにより、元気に育っている子どもを目の前にすると、それは母親の子育ての自信につながり母親の満足度は高くなると推察する。村井<sup>11)</sup>は、母乳育児支援は単に母乳育児率を上昇させるということに留まらず、安心して子育てができる環境の提供であり、母子の健康の維持・増進、そして親子の愛着形成の促進につながるものであると述べている。母乳栄養率を上昇することも必要であるが、母親が安心して母乳を与え、生き生きと子育てできるように支援することも同様に重要であると考ええる。一方、約1割の母親は不満と回答しており、その理由は「母乳のみで育てたかった」「児の栄養面に対する不安」などがみられた。また、その中には母乳栄養群の母親も含まれ、母乳のみであっても不安を持ち自尊心が低くなる場合が推測され、個々の母親の思いを把握した対応が必要である。

## 2. 母乳育児支援の現状と課題

母親が授乳中に「とても困った」「どちらかと言えば困った」と回答したものは、「母乳が不足ぎみ」が最も多く、「乳房・乳頭トラブル」と「乳頭痛」の順に多く母親の約3割を占めていた。また、平成17年度乳幼児栄養調査<sup>12)</sup>の中で「授乳について困ったこと」の11項目中9項目と比較すると、今回の調査が高い傾向を示した。調査<sup>13)</sup>では2件法と推測され、今回は4件法で回答を求めていることから調査方法による違いが考えられる。しかしながら、母親が授乳に関して不安・困っている項目は約10年前とほとんど変わっていないことは、母乳育児支援が推進されているにも関わらず、現状では支援の方法や時期などの再検討が必要であるとも考える。乳房・乳頭のトラブルや母乳不足感は母乳育児の中断に影響を及ぼす<sup>14)</sup>と言われており、したがって、退院後も授乳中に起こる可能性の高い母乳不足や乳房のトラブルなどの問題への支援は、母乳育児支援の大きな位置を占めると言える。

退院後、母乳育児に関して相談・支援を受けたと回答した母親は約4割であり、相談・支援者は、出産時からの身近な看護者や助産師・家族・友人など

が多くみられた。その支援に対して母親の約9割以上が満足と回答していることから、退院後の相談・支援体制はある程度充実していると推察される。一方、相談しなかったと回答した母親の約1～2割からは、「どこに相談したらよいか分からなかった」「近所になかった」「電話をかけづらい」との回答もあり、必要な時に必要な支援を受けるための情報提供が十分とは言えない現状もみられた。わが国では産褥1週間程度で退院となる出産施設がほとんどであり、今回の調査でも平均入院日数は6.6日であった。また、今回の調査の退院時の母乳栄養率は44.3%であり、母乳育児が十分確立できていないまま途中で退院する母親が約半数いると予測され、退院後の継続支援は非常に重要である。母乳育児支援ガイド<sup>15)</sup>でも述べられているように、母乳育児支援者は退院後の継続支援を確かにするために、母親自身がその地域で利用できる社会資源・情報源について母親と話し合い、母親自身が支援を受ける方法を知ることができるように支援することが大切である。

母親が希望する母乳育児支援のなかで、「自分で授乳ができるようになるための方法（抱き方・含ませ方）」「母親の疑問や不安を解決する支援」「母乳育児の利点や正しい情報を知らせてほしい」「母親の状態や気持ちを受け入れてくれる支援」「妊娠中から産後まで継続的で一貫した支援」の5項目は母親の6割以上が「とても思う」と回答していた。母親の受けた母乳育児支援に対する評価であり、期待であると推察する。母親は、母乳で育てたいと願い、出産直後より疑問・不安を持ちながら、正しい情報と適切な支援を希望している。久米ら<sup>16)</sup>は、われわれに要求される支援は、母親および家族の疑問・不安を解消し、母親が育児に自信を持ち、母乳育児に明るい展望を持って取り組んでいけるようにしていくことであると述べている。また、栗野は<sup>17)</sup>母乳育児がうまくいかなかった母親へのサポートとして、援助者は母親の選択を尊重し、それは子どもにとって最善の方法であったと母親自身が思えるような支援を提供する。たとえ母親が母乳を与えた期間が短かったとしても、自分が「母乳育児」をしたことを本人が肯定的に捉え直せるように助けることが重要と述べている。これらのことから、母乳育児に対する正しい情報と適切な支援が母親へ伝えられ、授乳を続ける中で母親の不安や悩みに思いを寄せ、適切に対処し解決できる支援が求められると考える。ま

た、母親自身が選択した栄養方法を尊重し、その方法に対して肯定的に捉えることができるよう支援することが求められる。個々の母親の希望する栄養方法ができ、子どもが元気であり、適切な母乳育児支援を受けたと捉えられることが、母親が満足する支援につながると考える。

出産後に母親が初めて行なう育児が母乳を与えることであり、育児がはじまる。育児のはじまりをよりスムーズに踏み出すことで、母親としての自信が早期に発達すると考えられ、そこに母乳育児支援の重要性があると言えよう。

なお、今回の調査では項目の全てに回答されている有効回答率が低い結果となった。今後の課題としては、調査項目の精選や回答方法および調査方法の工夫などの検討が必要である。

## V. 結語

1. 今回調査をした A 県内の 3 市 1 町の母乳栄養率は、退院時44.3%，1 ヶ月時53.4%であり、退院後に母乳栄養率の割合が増加しており、その傾向は乳幼児身体発育調査（2010）とほぼ同様な結果であった。また、「母乳栄養」と「ほぼ母乳（母乳の割合が80%を越える）」を含む母乳栄養率も増加し、月齢が進んでも65%を越えていた。
2. 母親の約90%は妊娠中に母乳栄養を希望していたが、6 ヶ月時点のほぼ母乳を含めた母乳栄養率は67.9%であり母親の希望が満たされているとは言えない状況にあった。しかし、児に対する栄養方法や入院中の母乳育児支援や退院後の相談・支援について、母親の約9割は満足と評価しており母乳育児支援についての満足度はおおむね高い。
3. 母親の約3割は「母乳が不足きみ」「乳房・乳頭トラブル」「乳頭痛」など授乳中に困ったことを抱えており、「母親自身で授乳ができるようになるための方法」「母親の疑問や不安を解決する支援」「母乳育児の利点や正しい情報を知らせてほしい」などの母乳育児支援を求めている。
4. 母乳栄養群の母親は、混合栄養群や人工栄養群の母親より満足度が高い。さらに母乳栄養率を高め、母親が満足する支援を行なうためには、適切な情報提供を行い、個々の母親のニーズに応じた母乳育児支援を継続して行なうことや母親が納得

し育児に自信を持てるような支援が必要である。

## VI. 謝辞

本研究にご協力くださいましたお母様方、保健センター等の施設の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成24年度熊本保健科学大学学内研究費の助成を受けて実施した。一部は第54回日本母性衛生学会総会・学術集会で発表した。

本研究における利益相反は存在しない

## 文 献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. 平成17年度国民生活基礎調査. p.2
- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. 平成22年度乳幼児発育調査の概要.  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/73-22-01.pdf> (参照2013/5/23)
- 3) 瀬川雅史:「赤ちゃんにやさしい運動」,「母乳育児成功のための10ヵ条」,「母乳代理用品のマーケティングに関する国際基準」. 母乳育児支援スタンダード第2版 (NPO 法人日本ラクテーション・コンサルタント協会編). 医学書院, p.13, 2015
- 4) 成田伸, 早川有子, 川崎佳代子, 他: 母親側と支援者からみた栃木県内における母乳育児支援の実態. 自治医科大学看護学部紀要, 2: 39-53, 2004
- 5) 前掲書1) p.3
- 6) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. 授乳・離乳の支援ガイド. 2007
- 7) 前掲書2)
- 8) 前掲書1) p.5
- 9) 張尚美: 退院後早期からのフォローアップの要点. 母乳育児支援スタンダード第2版 (NPO 法人日本ラクテーション・コンサルタント協会編). 医学書院, pp240-244, 2015
- 10) 柳沢美香: 退院後の母乳育児継続支援. 助産師雑誌, 66: pp58-64, 2012
- 11) 村井文江: 母乳育児支援とその現状. 産婦人科治療, vol.99 4: 360-366, 2009
- 12) 前掲書1) p.3

- 13) 前掲書 1) p.3
- 14) 山本浩世：「母乳が不足している」という母親の母乳育児に関する認識. 母性衛生, 50: 110-117, 2009
- 15) UNICEF/WHO: 赤ちゃんとお母さんにやさしい 母乳育児支援ガイド ベーシック・コース「母乳育児成功のための10ヵ条」の実践, 医学書院, pp295-302, 2009
- 16) 久米浩太, 田平陽子：退院後の母乳育児支援. 母親の満足度を高める BFH の母乳育児支援. ペリネイタルケア, 27: pp33-37, 2008
- 17) 栗野雅代：母乳育児に不安を持つ母親へのサポート. 母親の満足度を高める BFH の母乳育児支援. ペリネイタルケア, 27: pp38-45, 2008

(平成28年 3 月 1 日受理)

## Current Status and Issues of Breastfeeding in A prefecture: Explore better Support Systems for Breastfeeding

Yoshiko SUENAGA, Hanami HADANO, Yukiko NAKASHIMA

The purpose of this study was to clarify the current status and issues of breast-feeding in A prefecture, and to investigate the mothers' level of satisfaction with support system for breastfeeding. We conducted an anonymous self – report survey of 386 mothers at the one-year-old infant health checkup in three cities and one town of A prefecture between February 1, 2013, and February 1, 2014.

The questionnaire asked what methods of feeding mothers had wanted, the reality upon hospital discharge and in the following days. The questionnaire also asked the mothers if they felt they had enough support for breastfeeding.

The following are the results obtained:

1. At the one-month-old health checkup in three cities and one town of A prefecture, the rate of exclusively breastfeeding was 53.4% and later this rate increased. Similar findings are in the Physical Development Investigation of Babies and Young Children 2010 report.
2. 90% of mothers had hoped to breastfeed during pregnancy. 67.9% of mothers reported “exclusively breastfeeding” or “breastfeeding with supplementary formula feeding”. Mothers couldn't fulfill their expectations, but the mothers' level of confidence with the feeding methods was basically high.
3. 30 % of mothers reported “a lack of breast milk” and “breast and nipple problems”. Mothers hoped for better support for their breastfeeding like “Teach mothers how to manage breastfeeding by themselves” and “Support to deal with problems and anxieties of mothers”.
4. Mothers who reported “exclusively breastfeeding” or “breastfeeding with supplementary formula feeding” have higher levels of confidence than the mothers of “50 % breast milk and 50 % formula feeding” or “exclusively bottle feeding”. Giving supports to mothers for their different needs will raise breastfeeding rates and mothers' level of confidence.

These findings suggest that appropriate support for breastfeeding will help mothers to fully understand child rearing and become confident of themselves.